

平成29・30年度企画展「学生作品展」

深石 圭子^{*1} 富田 弘美^{*2} 藤田 恵子^{*3}
佐々木 麻紀子^{*4} 大淵 和憲^{*5} 高尾 純宏^{*6}

平成29年度（会期：平成29（2017）年2月20日（月）－4月28日（金））、平成30年度（会期：平成30（2018）年2月26日（月）－4月21日（金））に開催された「学生作品展」では、学生の卒業制作や実習・演習で制作した作品を紹介している。

1. 現代生活学部 生活デザイン学科

深石 圭子

平成29年度学生作品展展示報告

生活デザイン学科住生活デザイン分野の卒業研究は、卒業制作と研究論文に分けられ、そのどちらかの方式で指導されるが、平成29年度は、21名中の14名が卒業制作に取り組んだ。

「鎌倉 CONTAINER RALLY」 佐藤 緑子

観光地である神奈川県鎌倉市の3か所で、可変性のあるコンテナを使った建築物を展開した作品である。それぞれ異なるターゲットを定め、コンテナの再利用とそれを用いた地域の活性化・憩いの場所を提案している。

コンテナは、ほとんどが鋼鉄製であり、強度と耐久性が高く、安価な建築費用で済むことから住宅や店舗に再利用されるなど、注目を集めている。この作品で使用するコンテナは、車両での移動が容易な20ft（幅：2,438×奥行：6,058×高さ：2,591mm）に統一している。コンテナ単体としては、壁面や天井に開口部をはめ込む。さらには、コンテナの組み合わせにより、内部空間にも多様性を持たせることができる。このような様々なパターンの組み合わせにより、空間のバリエーション

が無限に広がり、それぞれの計画に個性を表出させた。

選定した敷地は、「雪の下2丁目」、「由比ヶ浜2丁目」、「由比ヶ浜4丁目」である。

鶴岡八幡宮の北にある雪の下2丁目に計画した施設は、大人のための憩い空間として、「和」を感じられる隠れスポットとして、カフェや土産物店が入る施設を計画した。大人・高齢者を中心とした鶴岡八幡宮を訪れる観光客をターゲットとしている。コンテナが規則正しく積まれ、コンテナのカラーは、黒・赤・白と、落ち着いた空間となっている（写真1）。

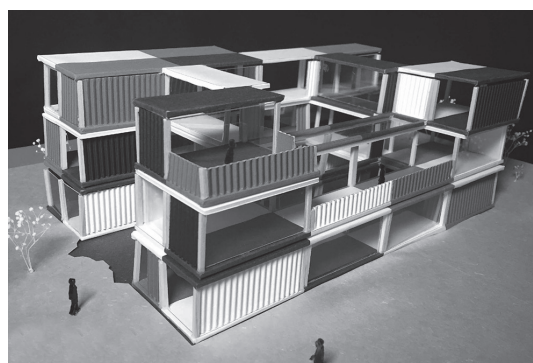


写真1 模型写真

由比ヶ浜2丁目に計画した施設は、親子を対象としたものとなっており、意図的に迷路のように入り組む空間を作り、鎌倉の街を巡る醍醐味を凝縮したかのような空間となっている（写真2）。鎌倉らしい小さな物販店舗がひしめき合い、にぎやかな空間を創出している。コンテナカラーは、赤と青で、レジャーをイメージした色彩とした。

^{*1} 深石 圭子（ふかいし・けいこ）平成30年度現代生活学部生活デザイン学科助教
^{*2} 富田 弘美（とみた ひろみ）平成30年度現代生活学部生活デザイン学科准教授
^{*3} 藤田 恵子（ふじた けいこ）平成30年度現代生活学部生活デザイン学科教授
^{*4} 佐々木 麻紀子（ささき まきこ）平成30年度現代生活学部生活デザイン学科助教
^{*5} 大淵 和憲（おおぶち かずのり）平成30年度現代生活学部非常勤講師
^{*6} 高尾 純宏（たかお すみひろ）平成29年度現代生活学部生活デザイン学科准教授

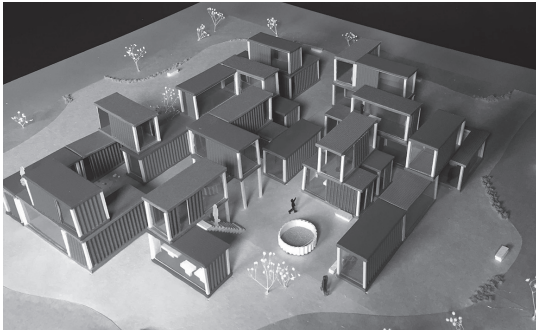


写真2 模型写真

そして、由比ヶ浜4丁目の鎌倉海浜公園内に計画した施設は、観光客だけでなく、サーファーや若い世代、ペット連れを対象に、南国気分を味わえる鎌倉リゾートとし、海沿いならではの解放感や爽快な風が感じられるよう計画している。建物は1・2階共にランダムに配置することで、自由な印象を表している（写真3）。色彩は、海をイメージし、青と白で構成している。

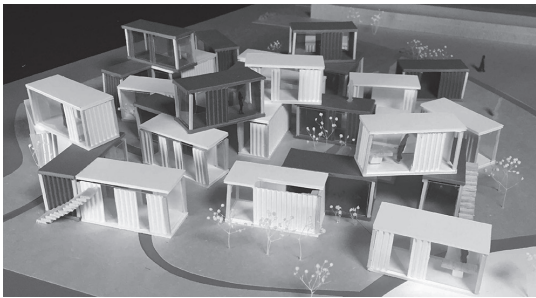


写真3 模型写真

仮設的であるが、その組み合わせ方により可変性のあるコンテナの魅力を建築物として再構築し、それぞれの想定した敷地で、バリエーションのある形を表現したことは、とても興味深い提案である。



写真4 展示風景

「継-karamu-」 片倉 愛子

JR上諏訪駅（長野県諏訪市）は、諏訪湖観光はもとより、霧ヶ峰高原・高島城などの最寄り駅にもなっており、また駅周辺には上諏訪温泉が湧出し温泉宿が

軒を連ねることから、多くの観光客が訪れる。さらに近隣には、3つの高校があり、朝晩は学生も多く利用する駅である。

このように観光客、市民、学生が多く利用する駅だが、毎年夏に開催される諏訪湖祭湖上花火大会などの際には臨時の改札口が設けられるものの、普段は諏訪湖とは反対側にある東口（愛称「霧ヶ峰口」）のみであり、駅からの諏訪湖や温泉街、国の重要文化財である「片倉館」へのアクセスがしにくい状況にある。また、このJR中央線を境に地域の交流や人の行き来が遮断されている。そこで、駅から諏訪湖へとつながる湖岸通りとJR中央線と町の文化や自然、人々をつなぐ施設を提案した（写真5）。

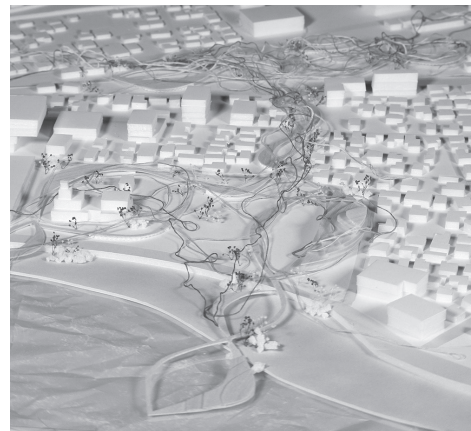


写真5 模型写真

「分裂してしまっている街をひとつにしたい」という作者の願いから、「人々が街を、建物を繋いでいく」というコンセプトのもと、制作が進められた。

本施設は湖に浮かぶ葉、風に流れる葉をモチーフとしている。それが遊歩道として緩やかに繋がりつつも、文化エリア、湖岸エリア、駅エリアの3域に分けられる（図1）。

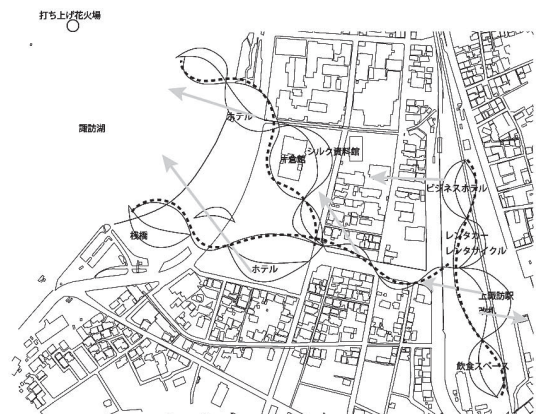


図1 位置図

文化エリアでは、上諏訪駅の改札から、諏訪湖へも山側の東口へも両方向へアクセスを可能とし、「片倉館」と、皇室や宮家が供された有形文化財「菊の間」を囲むように施設を配置している。そこにシルク博物館を併設させることで、諏訪の文化・歴史を継承していく。湖岸エリアでは、動線を諏訪湖へ繋ぐため、湖岸通りをメインストリートとし、全部屋が諏訪湖に向けたホテルを通り、遊歩道を進むと、その先は遊覧船へ搭乗する栈橋に繋がる。さらに駅エリアでは、「ビジネスホテル」や「レンタカー・レンタルサイクル」、「飲食スペース」、「メイン改札」から構成されており、人々によって賑わう駅への願いが込められている。

エリア設定についても、その特性を踏まえた上で、各々の位置づけや施設配置がなされている。それらが流れるように、遊歩道と絡めて計画がされている。遊歩道が単に施設と施設を繋げるものではなく、平面形状を工夫し、施設と一体化した計画がなされたことで、地域に根付いたデザインとなっているところを評価したい。



写真6 展示風景

「2020 オリンピア-参ノ道-」 稲崎 絵梨香

東京都渋谷区にある代々木公園は、1964年東京オリンピックの選手村として使われた歴史がある。そのすぐ近く、原宿駅から徒歩1分の表参道に接する集合住宅「コープオリンピア」(1965竣工)が現存している。この建物は、「高級マンション」の黎明期の代表例でもあり、1964年東京オリンピックに因んでその名前が付けられた。「オリンピア」とは、古代オリンピック開催地として知られる古代ギリシャの都市、およびその遺跡を意味する。

東京オリンピックの過去と現在の歴史を繋ぐために、この「コープオリンピア」を敷地として選定し、新たに「2020 オリンピア」という、外国人観光客をターゲットとした商業施設(宿泊・物販・体験型施設)と集合住宅の複合施設を計画した。

この敷地は、1964年東京オリンピックのメインスタジアムであった国立代々木競技場と2020年東京オリンピックのメインスタジアムとなる新国立競技場の2つの建物の間に位置する。これらの関係性から、本計画に最適な立地であると考えた(図2)。

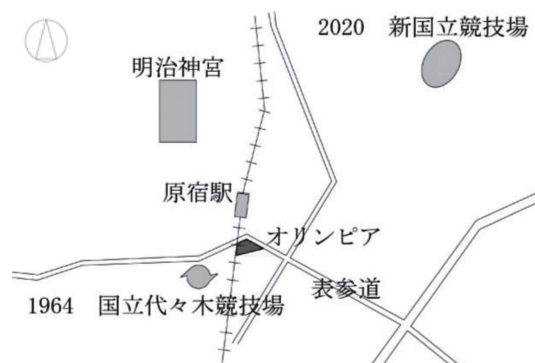


図2 位置図

北棟に住宅、西棟にホテル、南棟に日本の伝統工芸を体験できるエリア等を設けている。3棟の間には、地上階に3つ股に分かれるような前面道路につながる通路(参ノ道)が存在し、その稜線が建物の外形を作り出し、各棟を緩やかに関連づけている(写真7)。立面計画は、南棟は現存する「コープオリンピア」の表情をベースにして引き継ぎ、垂直を強調したデザインと、北棟西棟は、外壁を細かく屈折させることで、外部に対し表情を与えている。

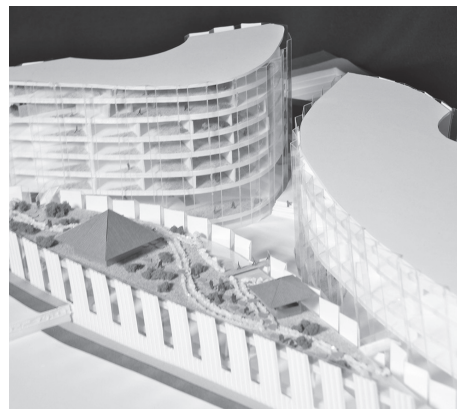


写真7 模型写真

北棟の住宅は採光が偏ってしまうため、メゾネット形式を採用している。また、西棟のホテルと南棟の庭園に繋がりを持たせるため、ホテルの客室と客室の間には外壁に面した坪庭を配置している。西棟の観光案内所と北棟の住宅ロビーにも、原宿駅と同じレベルの庭が視界に広がり、庭を様々な場所に配置することで、奥行きを持たせている。

南棟では、日本の魅力を伝えるべく、あらゆる日本

伝統芸能を見学できるスペースを設け、敷石の延べ段を模した通路にしている。屋上には、庭園として茶室や休憩処が配されており、都会の喧騒を忘れさせるような空間を作り上げている（図3）。

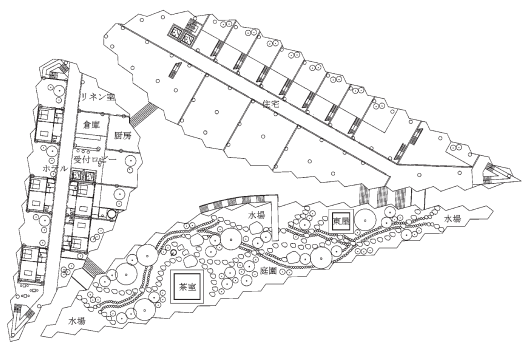


図3 2階平面図



写真8 展示風景

平成30年度学生作品展展示報告

生活デザイン学科住生活デザイン分野の卒業研究は、卒業制作と研究論文に分けられ、そのどちらかの方式で指導されるが、平成30年度は、20名中の17名が卒業制作に取り組んだ。

「町田・再生」

中山 柚香・高橋 己世美・飯草 美瑛都

町田市は、東京都の南端に位置し、自然豊かな地域である。その一方、中心部となる駅周辺はJR横浜線と小田急線の2路線が乗り入れており、多くの人が訪れる地域である。前期卒業制作では、JR横浜線・小田急線の駅ビルと複合商業施設を計画した。デザインコードを決めるなど相互に調整しながら個々に設計を進め、共同で3棟の商業施設とそれを繋ぐデッキ・広場の設計を行った。JR横浜駅と小田急線の乗り越えの不便さをデッキで解消し、デッキの下にはいくつかのテーマを持つ広場を設けたが、その結果として、駅周辺の特徴である様々な用途の建物が雑多に混在してい

る町田の界限性を無視した計画となってしまったため、後期卒業制作では、前期に設計した2つの駅ビルと複合商業施設を残し、新たな駅前空間を提案した。

町田市は、人口減少、進む高齢化、高度経済成長につくられた施設の老朽化、商店街の空き店舗化など、様々な課題に直面している地域である。このように町田の魅力は低下しており、これからは来場者の減少も見込まれる。そこで、町田らしさを見つめ直し、コンセプトである「界限性×路地」を軸に制作を進め、市内外から町田に来る楽しみを増やし、新たな賑わいや交流が溢れるまちを目指した（写真9）。

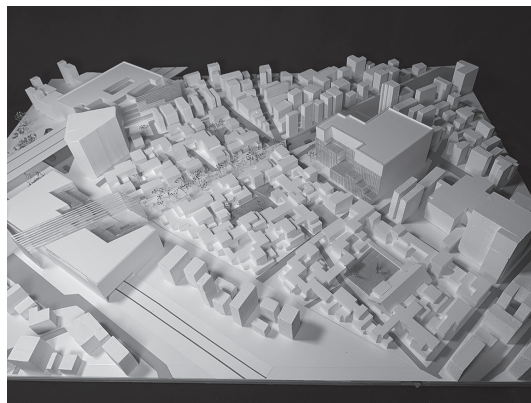


写真9 模型写真

まず、当該敷地を横断する国道47号線沿いに、町田市の樹である榎を植樹し、「ケヤキストリート」をメイン動線として計画している。路地には多くの店舗が並び、近所で気軽に集まることのできる「たまり場」的空間も多く配置している。この路地は地盤面のみならず、様々なフロアに存在し、より複雑に入り組んだ路地としている。そして建物は用途毎にまとめるのではなく、オフィスや文化施設、教育施設、商業施設など様々な用途を混在させることで、界限性を生み出し、立体都市のような空間を演出した。さらにスタジオ付き住居や単身用・ファミリー向け住居、大学生や留学生のためのシェアハウスなど多様な住まい方ができる居住スペースを設け、雑多だが活気のある「町田らしさ」を表現した（写真10）。

共同設計として取り組んだ作品だが、その規模もさることながら、プレゼンテーション時には自主的に3人共同のポスターを作成するなど、制作への熱意が感じられた。駅前に界限性を幾層にも重ねることで、より「町田らしさ」が展開出来ていることを評価したい。



写真10 模型写真



写真11 展示風景

「道路が繋ぐ人々と観光～道路休憩施設に寄与する建物計画～」 渡邊 泉

神奈川県中央部に位置する伊勢原市では新東名高速道路の開発に伴い、既存の東名高速道路を繋ぐジャンクションが建設されている（2019年3月開通）。一方、伊勢原市は少子高齢化の影響で、観光事業や産業に近隣の市町村より遅れをとっており、それらの活性化に手が行き届かない現状が感じられるという。そこで、伊勢原市に賑わいと活力を持たせるために、高速道路利用者も使用することのできる休憩施設と併設して観光発信や地域案内、地域住民も利用できる施設の計画を行った。

伊勢原市東富岡地域は東名高速道路が北から南へと横断しており、それと交差するように新東名高速道路が配置されている。さらに敷地付近には交通量の多い「国道63号線」、「国道246号線」が交わる大きな交差点がある。この部分の一角を敷地に選定し、配置計画を行った。

多くの利用者を呼び込む施設を展開するため、「遊び・学び・くつろぎ」の3つの要素を施設のコンセプトとし、「公共施設を利用する人の動線」と「伊勢原の観光としての動線」を内包している。大山方面と丸

山城址公園を結ぶ人の動線と、一般道・伊勢原駅利用者と高速道路利用者を結ぶ動線を交差させ、その軸線に遊歩道を重ねて計画し、区画を分割することで、建築の用途も重なるものとし意味を持たせている(図4)。その他、周りに主要施設、博物館、宿泊施設、公園を配置する。道路休憩施設の主要要素である無料駐車場、トイレ、売店、情報・案内コーナー、産直市場に加え、計画地内の既存の公園を遊びの空間、伊勢原の歴史や以前この付近の土地で発掘された旧石器時代の土器を展示し紹介する博物館、伊勢原の街並みを眺めることのできる宿泊施設を展開している。

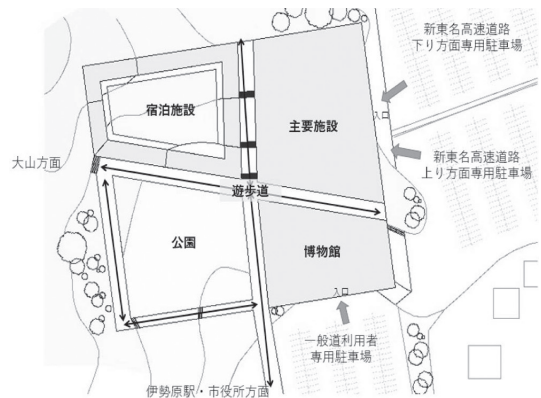


図4 コンセプト図

主要施設棟は、高速道路専用駐車場からすぐにアクセスできるように建物の正面に配置しており、内部にはゆったりとした吹抜の空間にフードコートと産直市場を配置し、多くの人を収容することができる。博物館棟は、博物館だけでなく地域案内コーナーやカフェを配置することで多様な使い方が可能となっている。宿泊施設棟は、元ある丘陵は残しつつ、建物を浮かせて配置し、公園についても南側斜面の実存の位置をそのまま利用することでレベル差をうまく利用して、ダイナミックな形状を作り出している（写真12）。

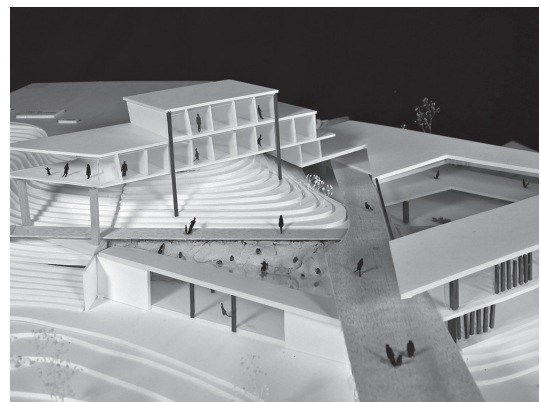


写真12 模型写真



写真13 展示風景

「Green Roof House ～スケルトン・インフィルによるコーポラティブハウスの設計～」 中盛 琴星

近年高層ビルが多く建設され、都市化された神奈川県横浜市。その中でも地域活性化に向けて力を入れている戸塚区を計画地として、コーポラティブハウスの設計を行った。コーポラティブハウスとは、居住希望者同士で組合をつくり、自らが事業主となって建物の企画・建築を行う集合住宅のことで、型にはまらないスタイルで個性を出すことができ、一戸建てよりも安く自由に設計できる。また、設計に至るプロセスを居住希望者と共有することで良好なコミュニティが形成できることも魅力の一つである。敷地は、現在の戸塚公会堂のある柏尾川に沿った一角のJR戸塚駅から徒歩約5分の場所である。周辺には、ショッピングモールや病院、区役所や小学校など住民の生活を支える施設が多数あり、日常生活を送る上で不自由なく過ごすことができる整った環境である。

“縁を通した多世代交流”をテーマに子供からお年寄りまでが一緒に楽しむことができる空間を備えている。『緑化』をコンセプトに掲げ、屋上庭園を設置し、川沿いに並んだ桜並木との繋がりを持った住宅の設計である（写真14）。都市化が進んだ地域でも自然に囲まれ、老若男女問わず過ごしやすい環境を目指した。屋上やルーフテラスから川沿いを見渡すことができ、春には自宅に居ながら花見を楽しむことができる。

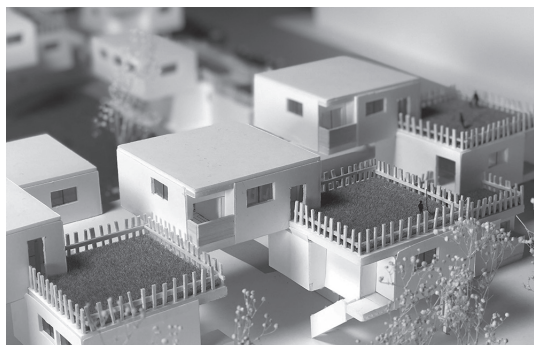


写真14 部分模型写真

この集合住宅には、共用スペースも設けているが、そこは住民全員が自由に利用できる空間となっている。入居後のコミュニティの拠点としても使われ、お茶室を備え、茶道・華道・着付けなどのサークル活動を通した多世代交流の場所ともなる。

各住戸は、主に2階建ての住戸とするがワンフロアの住戸も用意し、様々な家族の形に対応できるデザインになっている。

平面形状が正方形のボリュームの角を重ね、そこに螺旋階段を配置することで、メゾネットタイプが巧妙に組み合わされている。各住居間の上下階や界壁の接している部分を少なしてインフィルを各個人が自由に作れるよう配慮されている。場所によっては、直方体が浮いたような計画となり、外観を形作っている。立体構成がとても軽快に表現されている（写真15）。



写真15 全体模型写真

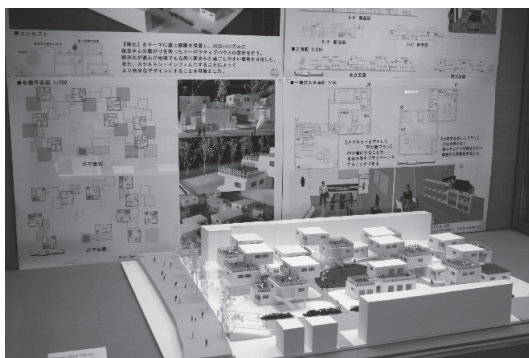


写真16 展示風景

2. 現代生活学部 生活デザイン学科

富田 弘美

オペラとバレエ公演の舞台衣装のデザイン・制作

はじめに

本研究室では10年ほど前より地域連携活動としてオペラとバレエ衣装のデザイン・制作に参加してきた。オペラ公演では、公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団の主催による平成29年度のオペレッタ

『チャルダシュの女王』、平成30年度のオペラ『魔笛』とオペレッタ『こうもり』に参加した。この財団は、舞台芸術の普及と啓発、および若手人材育成として市民参加型のオペラのイベントを企画し、プロの音楽家・市民・学生とのコラボレーションによる公演を南大沢文化会館にて開催している。バレエ公演では、中原由美子バレエ・フレイグランズ主催の平成29年度バレエ『シンデレラ』と平成30年度の創作バレエ『動物の謝肉祭』に参加した。また、これらの公演に東京家政学院大学、東京都足立区が後援しており、シアター1010（北千住）でも開催された。

衣装はデザインコンセプトを考え、色彩・材料（生地）等をデザイン画で表現し、学生が演出家、音楽監督、舞台監督、振付家、スタッフにプレゼンテーションを行い、照明・演出効果、振付による身体の動きや舞台セットとの調和、ダンサーや歌手の長所を引き出すことを考慮してデザインした。

衣装説明

1. オペラの衣装

(1) オペレッタ『チャルダシュの女王』のシルヴァの赤いドレス衣装

平成29年度卒業 小林伸子（赤いドレス）

高須詩織（赤い腕飾り）

平成29年度卒業 田代裕梨

（赤と黒の羽根飾りのヘッドドレス）

平成30年度卒業 田口結菜（赤いドレス）

高塚安奈（オーバースカート）

オペレッタとは「小さいオペラ」「軽歌劇」などをいい、喜劇的で対話のせりふや舞踊を取入れたもので、演目のチャルダシュは、テンポが速く独特なリズムを持ったハンガリーの民族音楽のことである。主人公シルヴァは「チャルダシュの女王」と呼ばれる歌姫である。その彼女とオーストリアの貴族青年との身分違いの恋が、ウィーンを舞台にして繰り広げられ、紆余曲折の末、ハッピーエンドとなるコメディ仕立てになっている。

この衣装は、第1幕冒頭でシルヴァが舞台中央から登場する場面で着用し、「炎のような」という歌詞のイメージを赤のドレスと金色の装飾で表現した。また、歌いながらオーバースカートを外して脱ぎ捨てるという粋な演出があり、その中から現れるのはコントラストの強い赤と黒のスカートである（図1）（図2）。ヘッドドレスは、布で包んだ発砲スチロールをプラトーの上にのせて縦方向に高く盛った土台の上に赤と黒の羽根で作った花、リボン、レース、ブレード、ビーズな

どを付けて華やかにした（図3）。腕飾りは、ロングの手袋ではスカートの脱ぎ捨てが難しいため、手首までの腕飾りとし、上部には羽根飾りが付いている（図4）。



図1 シルヴァの赤いドレス

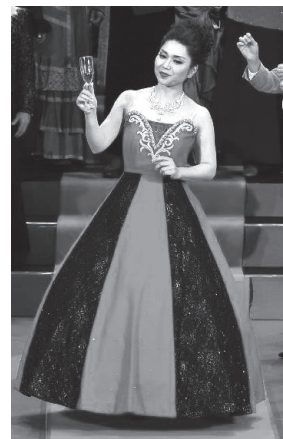


図2 赤黒のドレス



図3 羽根飾りのヘッドドレス



図4 羽根の手袋
撮影：フォトチョイス

(2) オペラ『魔笛』の衣装

平成29年度卒業

高須詩織（王子）、田代裕梨（僧侶）

平成30年度卒業

田口結菜（ザラストロ・星の飾り）

3年 佐藤美穂（弁者1・僧侶）

高頭華菜絵（弁者2・僧侶）

オペラ『魔笛』は1791年、モーツァルトが亡くなる直前に作曲したものである。王子タミーノと王女パミーナが結ばれるには、清らかで徳の高い人になるように、いくつもの試練を乗り越えていくという物語で、子どもにも大人にも楽しみながら心に響く演目である。

衣装については、神殿に仕える大司祭のザラストロ、弁者、僧侶1、僧侶2には、金色で金属的光沢のあるラメベルベットを使用し、裾の広がりや装飾の量で司祭たちの階級を表現した（図5）。王子の衣装では、他の歌劇団の衣装を見ると和服をイメージしたものが、さらに、演出家の意向によって平安時代の貴族

の狩衣^{かりぎぬ}を参考にした。素材は白地で張りのあるグログランをベースにし、前端、衿、袖口、帯、肩に和柄の生地を入れて橙色の平らな組紐で縁取りをし、袖口は穴を開けて組紐を通した装飾になっている（図6）。



図5 大司祭ザラスト(上)弁者(右2番目)僧侶1,2(左右)



図6 王子 撮影：フォトチョイス

(3) オペレッタ『こうもり』の衣装

3年生 高頭華菜絵（ドレス・ドレープ）

3年生 宮本楓恋（髪飾り）、
栗林南月（仮面・プリーツ）

4年生 鄭 宇凡、高 岩（管理・修正）

このオペレッタは1874年、ヨハン・シュトラウス作曲によるもので、優雅で軽快なウィнна・ワルツのメロディーが親しみやすく、国内では数多く公演されている演目である。

19世紀後半のドレスの特徴は、後ろスカートが膨らんでいるバussル（腰当）スタイルであり、ドレープ、プリーツ、ギャザー、タック、無地と柄物や光沢と無光沢の組み合わせなど、まるで室内装飾のような要素がある。ヒロインロザリンデの衣装もバussルスタイルで「エキゾチックで妖艶な大人の女性」をイメージし、生地は光沢のあるベロアとチェック柄の組み合わせ、無光沢のプリーツや光沢のあるドレープなどを取り入れた。前後のスカートのドレープは、本来はスカートをたくし上げて着用していたが、楽屋での着替えを考慮し、ベルトに形作ったドレープやギャザーを

縫い付けたものをウエストに巻き付けている（図7）（図8）。仮面は羽根、ブレード、ビーズなどを使用し、メガネのフレームを土台にして取付けているため、舞台上では片手で仮面を支える必要がなく、演技し易いように工夫している。髪飾りは、軽い発砲スチロールを黒い生地で包み、それを上方向に高く盛り上げて土台を作成した。その上に羽根、花、レース、ブレード、ビーズなどを隙間がないように配置した（図9）。

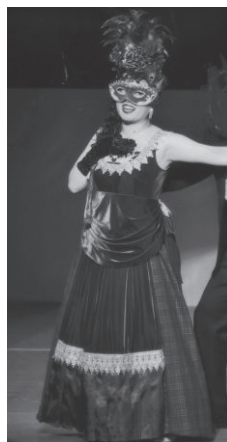


図7 ロザリンデのドレス



図8 バssルスタイル



図9 仮面とヘッドドレス 撮影：長沢直美

2. バレエ衣装

(1) バレエ公演『シンデレラ』の衣装

平成29年度卒業 高須詩織

（シンデレラのグレーと白のドレス、装飾の靴）

平成29年度卒業 田代裕梨

（継母のガウンと藤色のドレス）

平成30年度卒業 高塚安奈

（姉の水色のドレス、青コルセット）

4年 竹田涼花

（妹の黄色のドレス、ピンクドロワーズ）

3年 久保真彩（妹の黄色のドレス、髪飾り）

3年 高頭華菜絵（妹の黄色のドレス、ドロワーズ・
ピンクコルセット）

一般に舞台衣装は表面的な装飾に目を奪われがちだ

が、バレエの場合は特に身体の動きを妨げない素材や縫製の耐久性が要求される。さらに着脱のしやすさ・役柄に合わせたデザイン・色彩・装飾の位置などが重要になる。

- 1) シンデレラの灰色のドレスは、みすぼらしさや灰で汚れた服をグレーの素朴な木綿素材によって表現した。さらに、三角巾・エプロン・袖には灰の汚れとして絵の具で汚れを描き入れた(図10)。
- 2) 舞踏会の白いドレスは、みすぼらしいグレーのドレスと仙女に魔法をかけられたドレスの違いを強調し、身頃はオーロラ色のジャカード織、スカートは銀のラメが唐草模様で吹き付けられ、照明が当たると輝く生地を使用して気品高い豪華さを表現した(図11)。
- 3) 金色レースのヴェールは、4mの金色ラメ入りレースを使用し、舞踏会に登場する時になびかせた(図12)。
- 4) 舞踏会で落とすシンデレラの靴は、銀のスパンコールとリボンレースの上にレジンで作った水色のビジュを乗せ、銀のブレードで縁取り、オーロラ色に輝くストーンを散りばめた(図13)。



図10 グレーのドレス



図11 舞踏会の白いドレス



図12 舞踏会の金のヴェール



図13 舞踏会の靴

ダンサー：阪井麻美 中原由美子、撮影：和田 修

- 5) 継母の舞踏会のガウンは、姉妹の衣装の色彩(水色・黄色)と重ならないように藤色のバックサテンを使用した。胸元にはゴールドのモチーフを施し、スカートは動きやすくフレアを入れた。ダンサーは大柄な男性であり、継母の自信過剰で高慢な役柄を大袈裟な動きでコミカルに演技する為に、手

- 足の可動域を広く確保してパントマイムの振付を演じやすくした。ドレスのデザインはロココの時代に貴族が着用したローブ・ア・ラ・フランセーズスタイルを参考にして、ピエス・デストマ(胸当て)、アンガジャント(袖口の飾り)、首から前端には幅広のフリルとブレードなどを施した(図14)。
- 6) ガウンの下地の藤色のドレスは室内ドレスであるが、スカート部分は2着共通に使用し、着回し効果を持たせた(図15)。
 - 7) ウィッグと頭飾りは、継母は男性が演じるのでロングヘアのウィッグを使用し、前髪はセンターで分け後頭部に流し、シニヨンにする為に長さを切って調整した。また、このウィッグが激しい動きで脱げないように髪留めを使用し、さらに紐状のレースを付けて顎の下で結わえた。髪飾りは、リボンやビーズ、羽根を用い、華やかな直径10cmくらいの花を造形した。また、色彩は、藤色や緑色の羽根を使用し、衣装の色合いに調和させた(図16)。



図14 舞踏会の継母と姉妹のドレス
ダンサー：長瀬直義 森 志織 脇田茶恵、撮影：和田 修



図15 藤色の室内ドレス



図16 ウィッグと髪飾り

- 8) 姉妹の水色と黄色のドレスは、妹は黄色とオレンジの暖色系、姉は水色と緑の寒色系の色彩にまとめ、継母との配色効果を考慮した。生地はペイズリー柄のジャカード織素材を基本にし、スカートの裾からオーガンジーとチュールをのぞかせて軽

やかさを出した（図14）。

- 9) コルセットとドロワーズは、第1幕で仕立屋が水色と黄色のドレスを運んでくる。姉妹はコルセットとドロワーズを着てふざけたり、喧嘩をしているが、ステージ上で素早くこれらの下着の上に各ドレスを着用しなければならない場面である（図17）。



図17 姉妹の青とピンクのコルセットとドロワーズ
ダンサー：森 志織 脇田茶恵、撮影：和田 修

- (2) 創作バレエ『動物の謝肉祭』水族館より魚の衣装
4年生 鄭 宇凡（青系ドレス）

3年生 高頭華葉絵（赤系・黄色系ドレス）

『動物の謝肉祭』は1886年サン・サーンス作曲による全14曲の組曲で、「水族館」は第7曲目で水槽の中を泳ぐ魚をイメージした曲である。

衣装はフィット・アンド・フレアスタイルのワンピースドレスでアンダーバスト切替え、素材は経糸に細いポリエルテル糸、横糸に透明フィルムを使用したオーガンジーと白地を重ねた淡い色（青系、赤系、黄色系）である。身頃上部から後ろのヒップラインには、水槽の中で煌めく魚のウロコを表現するために、ラメ素材2種とジョーゼットの生地を丸く切り取り、約100枚を縫い付けた（図18）（図19）。さらに、後ろに向かってスカートの裾が長くなり、フィッシュテールとしてアコーディオンプリーツ加工をした1/4の円形をはめ込んでいる（図20）。



図18 胸元のウロコ部分

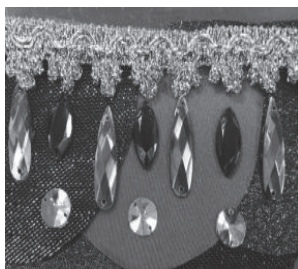


図19 胸元の装飾部分



図20 ドレスとフィッシュテールのプリーツ
ダンサー：高木 綾 阪井麻美 森 志織、撮影：和田 修

おわりに

バレエやオペラの舞台は、演出・振付、音楽、身体の動き、舞台美術、衣装デザインなどが総合的に融合した芸術である。衣装のデザイン段階では、音楽のテンポ、リズムや曲想をよく把握し、ダンサーや歌手の動きを損なわないような素材を検討して形態を造形しなければならない。学生たちは多くの時間をかけてサイズや形態の補正直しと動き易さを検討してきた。その結果、ダンサーが本番で着用し、アップテンポで踊った時の布の翻りやドレープの動き、照明で輝く胸元のデコレーションなどをステージ上で観たときは、何とも言えない充実感を得たことと思われる。

3. 現代生活学部 生活デザイン学科

藤田 恵子

平成29年度卒業研究「高齢者施設で使用するエプロンとポーチの制作」 富岡 美帆

本研究は高齢者施設で働いているスタッフを対象に、ユニフォームの不満や勤務中の不便を調査し、介護職員および利用者のエプロンと、介護職員のポーチや介護ロボット着用時のポーチの制作をし、介護現場に提案することを目的とした。

研究方法として東京都と神奈川県18棟の高齢者施設を対象としてアンケート調査を行った。主に着用しているユニフォームに関して質問し、エプロンの必要性や着用してみたいユニフォーム等についての意見を聞いた。時期は平成29年5月～6月に郵送法で行い、回収率は12棟145名で約67%であった。本研究は社会福祉法人友愛十字会砦ホームにご協力頂き、施設見学や写真撮影、制作作品のご意見をいただいている。

また、作品制作を行うために、インターネット通販のポーチやエプロンを調査し、更に実際に店舗で既製品のポーチやエプロンをチェックして工夫点を制作の

参考とした。

○スタッフ用ウエストポーチの制作（図1参照）

アンケート調査の結果、スタッフは勤務中にペン・PHS・メモ帳を持ち歩いていることが分かった。現在使用している既製品のエプロンやユニフォームのポケットは、スタッフの腹部や胸の位置にあり、介護時には利用者の顔や身体に当たることから、ポケットの位置の改善が必要であることが分かった。利用者の身体に当たる心配のない部位である臀部に装着するウエストポーチを制作した。大きさは縦20cm×横30cmにし、素材は薄く丈夫なナイロン製で、男女共に使用できるよう黒色にした。

○マッスルスーツ装着ポーチの制作（図2参照）

マッスルスーツとは株式会社イノフィスが販売する着用型ロボットで、背中に背負うことにより、人や物を持ち上げる際の身体の負担を軽減し、腰痛予防になることで現在注目されている。しかし、このマッスルスーツを着用するとズボンのポケットが塞がってしまい、PHSやペンが取り出せなくなることから、スーツ本体の大腿部のクッション部分に装着可能なポーチを制作した。丈夫なナイロン製で、PHSの出し入れができるゆとりを入れたサイズである。

○スタッフの食事介助用エプロンの制作

アンケート調査から70%以上の人が介護中にエプロンを着用し、そのうちの約半数の人が食事介助時にエプロンを着用していることが分かった。また80%以上の人がエプロンは防汚や衛生管理のため必要だと回答し、前当ての付いたエプロンが好評だったことから、前当て付きのエプロンを制作した。デザインの異なる5種類を被験者13名に試着してもらった結果、丈は70cm、身頃は臀部が隠れ、腰ヒモは腹部で結び、首ヒモはアジャスターで調節できるデザインに決めた。素材は速乾性に優れたポリエステルと綿の混紡の生地を使用し、色はリラックス効果があり、食事の妨げにならないアイボリー色にした。

○利用者用食事エプロンの制作（図3参照）

砵ホームの利用者は、車椅子に座ってエプロンを着用して食事をするが、既製品の長方形のエプロンでは、座面の脇に食べものがこぼれて服が汚れてしまう。この改善策として肘掛け部分を覆う凸型のエプロンを制作した。素材はこぼした際に手入れがしやすいように撥水性のあるナイロンを使用し、花柄にすることでシ

ミが目立たないようにした。地の色は既製品でも人気があり、食事を妨げない優しいピンク色を使用した。



図1 スタッフ用ウエストポーチ装着



図2 マッスルスーツのポーチ装着

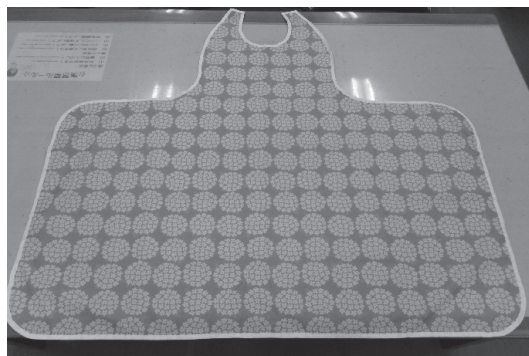


図3 利用者用食事エプロン完成品



写真1 展示の様子

平成30年度卒業研究「裂織りを取り入れた大島紬のリメイク」 平岡 春菜

祖母が昔着用していた大島紬の着物を使用し、自身のコートとスカートのセットアップを制作した。シックで高級感を醸し出す大島紬に裂織りを部分的に取り入れ、裂織りの持つ素朴な風合いをアクセントにしたデザインにリメイクし、祖母の着物を現代風に蘇らせることを目的とした。リメイクの本体として使用した大島紬

は、奄美大島出身の父方の祖母が母方の祖母に家族になる際にプレゼントした一族の思い出の品である。

まず、裂織り及び大島紬について文献を調査した。また、裂織では別のきものを裂き、テキスタイルの織物の実習で学んだ知識を生かして部分的に使用する部位の試し織りをした。さらに大島紬の着物を解体し、コートとスカートをデザインし、仮縫いおよび制作をした。

大島紬は、主に奄美大島で生産されている絹織物であり、伝統のある手法で作られたものである。今回使用するものは大島紬の片ス式という経緯緋の技法で、見た目がTの字になっているものであり、大麻柄のシックなグレーの色である。

裂織とは、古くは衣類を持つことのできない人々が使わなくなった布などを裂いて、糸として再利用して布に織ったものである。今回は、2種類の織密度の異なる試し織りをし、作品制作に適した方法を検討した。裂く手法としては、布を1cm～1.5cm幅で均等になるように裂いて、緯糸として使用し、平織で織るのが一般的である。布を裂く方法は何種類かあるが、今回は昔ながらの手で裂く技法で行った。布として使用することや、大島紬の生地の高さととのバランスを考え、1cmに7本の経糸を撚って使用し、織密度の高い方を採用した。袖口とくるみボタンに裂織した布を使用した。ボタンは、大島紬を使用すると地味になりすぎるため、裂織りの華やかな赤色の生地でくるんだ。

大島紬を使用した制作の手順は、まず着物を分解し、洗濯をして、アイロンをかけた。コートとスカート制作のために自身の計測をし、パターンを制作した。その際、リメイクという観点できものの直線的な構成をできるだけそのまま生かすように考え、コートの身幅を着物の身幅のまま利用し、元の着物を細かく分解せずに裁断を行う方法を採用した。足りないコートの袖幅には着物の袖と衿の部分を足して裁断を行った。さらに仮縫いと補正をし、裏地をつけて縫合した。

大島紬の生地が残布が少なく、コートに加えてスカート全体を制作するには1着のきものでは足りないため、配色を考えて明るめのグレーの生地を選んでスカート制作をした。右脇の縦方向に残布の大島紬を縫合してアクセントとした。スカートはコートのシルエットに合わせてセミタイトにして、セットアップとした。

父方の祖母から母方の祖母に贈られた家族の思い出の着物をテーマとした。そのままでは袖を通す機会がなかった着物を洋服にリメイクすることで記念品の大島紬を甦らせることが出来た。



図4 リメイクに使用した大島紬



図5 裂き織に使用した赤いきもの



図6 裂織りした赤い布の袖口とくるみボタン



図7 制作作品



写真2 展示の様子

平成30年度卒業研究「デニム地を使用したフォーマルウェアの提案」 村越瞳

一般的にデニムは、結婚式や高級レストランなどのフォーマルな場には適さず、カジュアルなイメージの強いファッション衣料であると考えられている。しかし近年では、家電メーカーや保険会社などの大企業で「ジーンズ出勤」を解禁する動きが広がってきたり、ドレスコードをデニムに揃えた結婚式などもあり、デニムに対する意識の変化がみられる。

そこで近年の傾向をもとにしてデニム地がフォーマルウェアになり得る装飾について検討し、1/2サイズのワンピースで装飾の提案をすることを目的にした。

2018年6月に本学学生とともにインターネットでもデニムについてのアンケート調査を行った。

さらに、アンケートの結果をもとに1/2サイズのボディを使用し、黒色のデニム地にリボン、ビジュール、花の刺繍、レース、フリルの装飾を施した5着の製作をした。また、2018年12月に本学学生を対象とし、5種類の作品を見ながらこれらの装飾を施したデニム地のドレスは、フォーマルウェアになり得ると思うかについてアンケート調査を行った。

アンケートの結果から、デニム地の服やジーンズを好んで着用するかという問いに対し、55.8%がよく着用すると回答した。着用する理由として、「どんな服にも合わせやすいから」「楽だから」という回答が多かった。購入価格については、アウター以外は5,000円以内という回答が半数以上を占めた。リーズナブルな価格で手に入ることや、コーディネートしやすい着心地の良さも含め、季節や流行に左右されず、広い年齢層に愛されるファッション衣料であるといえる。また、デニムのアイテムの着用場面について、90%以上が日常や通学など、どちらかというと普段着として着用していることが明らかとなった。

一方、デニムが不適合な場面の問いについては、冠婚葬祭、パーティー、高級レストラン、正式な場などの回答が多かった。理由として、「カジュアルすぎる」「だらしない」などの意見が多く、デニムはフォーマルな場に適さず、カジュアルなイメージが強いと認識していることがわかった。

さらに、デニムにどのような色、シルエット、装飾にしたらフォーマルウェアになり得るかの問いに対して、色は黒が37%、シルエットはタイトが30%、装飾は花の刺繍が19%であった。これらのアンケート結果をもとに、黒のデニム地でベアトップのタイトなドレスを基本型として1/2サイズで、リボン（図8）、

ビジュール、花の刺繍（図9）、レース、フリルの装飾5着（図10）を制作した。

さらに制作したリボン、ビジュール、花の刺繍、レース、フリルの装飾を施した5着を見て、これらの装飾のうちどれがフォーマルウェアになり得るかアンケート調査を本学学生におこなった結果、リボンの回答が最も多かった。

最初のアンケート結果や制作した作品を見ながらのアンケート調査などの結果を基に、本卒業研究では5種類全てをフォーマルウェアになり得る装飾として提案したい。



図8 リボン

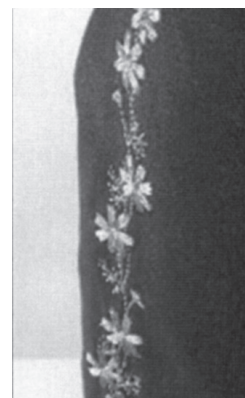


図9 刺繍



図10 左からデニム地にリボン、ビジュール、刺繍、レース、フリルの装飾を施した

平成30年度卒業研究「二次元男性アイドルの舞台衣装の制作」 山口 莉奈

少し前まではアニメというと子供が見るものとして認識されていたが、最近では大人にも人気が出ている。アニメにも様々なジャンルがある中、私たちの世代から絶大な人気を誇る男性アイドルアニメの衣装に注目した。アイドルといえばきらびやかな衣装が特徴だと考え、二次元アイドルはどのような衣装を着用しているのか調査し、実際に衣装制作を行うことを目的とした。

まず男性アイドルアニメという定義を「歌う芸能ジャンル」とし、人気となったきっかけを調べた。また、このジャンルの中で、2009年から2018年までの10年間でテレビ放送された男性アイドルアニメを調査し、作中登場する衣装のデザインの傾向をまとめた。さらに、放送時の技術や曲調との関係を考慮してデザイン画を作成した。

次に、三次元のアイドルのライブ衣装の作り方を調べたところ、ダンスなどで体の可動域を制限しないようにしていることが判明した。デザイン画をもとに自身のサイズのパターンを作成し、衣装の制作を行った。また、使用生地はステージ上で照明が当たることを想定して選んだ。

近年、アニメの人気は上がり続けており、直近10年でも年間放送数が増加してきている。その中でも2011年に放送されて以来人気のある男性アイドルアニメの衣装の傾向について調査をおこなった。そして、1グループを選びその中の2人の舞台衣装のデザインをし制作した。

パターンを作成するうえで、男性アイドルである嵐の舞台衣装の工夫を参考にした。舞台上は照明が常に当たって暑くなってしまうので少しでも涼しくなるように、シャツの袖をなくす工夫をした。また、細かい動きのダンスもあることから、体にフィットしていたほうが動きがわかりやすくなるため、ジャケットは4枚構成にした。使用する生地の素材にもこだわり、照明が当たったときに光が反射するようなサテンなどを衿やジャケットの縁取りに多く使用した。

図11および図12の右側は完成した衣装である。滑らかな肌触りとしっかりとした張りや腰があるコスチュームツイルを主に使用した。今回は機能性よりもダンス衣装ということを優先し、裏地をつけず縫い代の始末は共布のバイアスで処理をした。パンツはすっきりとした印象にするため、センタープレス処理を施した。また、装飾を全て金色にすることで統一感と華やかさを表現した。バイアスは重厚感のあるバックサテンを太めに使用してアクセントにした。

図11はデザイン画と制作作品である。衣装はターンが見せ場のダンスがあるため、どの角度から見ても華やかになるようにサイドにはファー、バックには金のラメシャーをつけた。また、上衣はベストの形にして、腕の可動域を狭めないようにした。

図12はデザイン画と制作作品である。衣装は中性的なイメージにするために、ベレー帽・フリルタイ・ロングブーツを制作した。また、曲中でこのキャラクターのカラーである紫のライトが当たる場面があるた

め、マントには様々な角度からのライティングに反射しやすいクラッシュペロアを使用した。ジャケットとマントはスナップボタンで留めて取り外しを容易にできるようにし、境目を目立たなくすることと装飾性を兼ねて肩章をつけた。



図11 デザイン画（左）と制作作品（右）



図12 デザイン画（左）と制作作品（右）

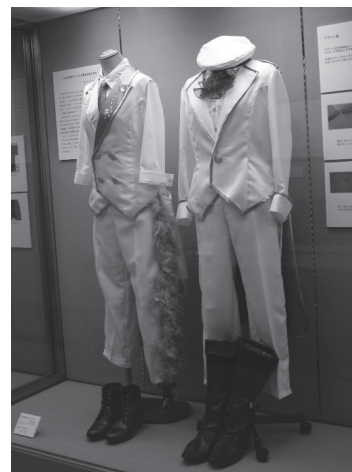


写真3 展示の様子

4. 現代生活学部 生活デザイン学科

佐々木 麻紀子

平成29年度卒業研究「手描き本友禅による唐草文様地ネクタイと尾長鶏霞図ストール」 小林 みずほ

平成29年度卒業研究作品として、小林みずほの手描き本友禅による唐草文様地ネクタイと尾長鶏霞図ストールを展示した。

伝統にこだわりや遊び心を添えた趣を取り入れたデザインの作品制作を行うために、友禅染の特徴である糸目糊と彩色を活かした作品2点を制作した。

1つ目の作品は、糸目を活かし、糸目のみで模様を表現することにチャレンジしたものである。細かな唐草文様を糸目糊の繊細な白い線のみで表現するために試行錯誤し、最終的にゴム糸目をを用いて細く糸目糊置きを行い、地染をした。使用した「ゴム糸目糊」は、もち米と糠で作る「ねば糊」よりも柔らかく、ひび割れ等も生じにくく、温湿度の影響も受けにくいいため、細く長い曲線等を描くのに適している。しかし糊の粘度調整が難しいため、粘度に慣れ、思うような糸目を描けるようになるまで試作を繰り返し、理想の糸目糊の粘度調整に至ることは卒業研究という長い時間をかけて制作する作品にふさわしい素材であったと考えている。作品としたネクタイは掛けた際に見える大剣、首回りの中はぎ、普段は見えない小剣の3つで構成されており、その小剣にだけ唐草模様が描かれた一見無地に見えるネクタイとなった。

2つ目の作品は友禅の多彩な彩色を活かし絵画的な表現を特徴とした作品である。背景に日本の伝統的な吉祥文様を明るい色彩で取り入れ、写実的な尾長鶏との対比が面白い作品となっている。

メインとなる鶏では全身の羽の構成や色を写真でよく観察し、使用する染料とゴム糊で、できるところまで色と形を再現した。こだわったのは尾の陰影と赤、白、黒の3色である。この3色をはっきりすることでストールの中の尾長鶏の存在感をより強くすることを目指した。体毛の羽は緑や赤の上に黒を塗ることで黒羽にも見えるような色を表現し、その模様は細い糊置きによって細やかなものとなった。ストールを流れる尾は用いた筆と黒一つでできる限りのグラデーションを描いた。友禅の工程の一つである色挿しは陰影が表現できる分、ムラになりやすいという特徴を持つ。その水彩に似た特徴を利用して羽の軸などの細かい影を表現することができた。

3つある霞中に毘沙門亀甲と七宝、市松模様と曲線

を描いた。この曲線によって硬いイメージを思わせる市松の直角を柔らかく見せることができた。色は鶏を邪魔しないために全体的に薄い色にして、淡い茶と青と黄の3色に統一した。

地色は暖色系とし、鶏冠の赤と合わせた薄い赤を使用した。一見、尾長鶏の黒羽が重い印象を与えるが、全体を見てみると薄い赤の地色とのバランスが良いものとなり、満足のいく作品となった。これらの作品は、これまでの感謝を込めて制作者が両親へ贈ったことを記載し、卒業研究作品の報告とする。

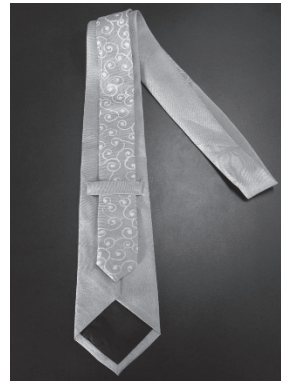


図1 唐草文様ネクタイ



図2 唐草文様部分



図3 尾長鶏霞図ストール



図4 ストール部分

工芸染色実習B

生活デザイン学科の専門科目の一つとして、「工芸染色実習B」がある。作品制作の過程を通じて染色技法を体験し、伝統的染色法への理解を深めることを目的としており、日本の代表的な染色技法である、絞り染め、ろうけつ染、手描き本友禅染の技法を取り上げ作品の制作を行っている。技術の稚拙さやセンスの優劣は無関係に各自の個性が反映された、味わいの異なる世界でたった一つだけの手作りの作品が出来上がり、また、染色の楽しさ、1つの作品を努力して作る達成感を得ることで手工芸染色への関心を高めることができる。出品者を表1に示す。

今回展示した作品は、絞り染技法では、天然染料で染める連続柄のシルクシフonsストールと伝統的7種の絞り技法を用いた袱紗の2点である。作品を2点制作することにより、数多くある絞り技法を体験する機会を増やすだけでなく天然染料と合成染料の浸染による染色方法の特徴についても学ぶことができるようにしている。

手描き本友禅の技法ではバックの制作を通じて、糸目糊による防染方法、刷毛による引き染め方法などを学んでいる。図案や色彩の自由度が高いため学生の個性が反映された作品が出来上がり、学生も試行錯誤しながら作品制作を行っている。友禅染は制作工程が多く複雑なため、授業では絞り染の制作と並行して進めている。個々に進度を確認し計画的に進めて行く必要があり、計画性も養うことができる。

ろうけつ染では革のマルチトレーを制作している。革の特徴や扱い方を理解しながら、木ロウで防染し酸性染料で彩色を行っている。ろう特有の亀裂をいかに作品に活かせるか、技法による制約を受けて図案を考えていく楽しさを味わうことができる。

平成30年度は型染の額絵も制作した。桜または、鳥のどちらかを選ぶが、摺込み具合によって色濃度を調整するため、同じ柄でも趣の異なる作品が出来上がった。

カリキュラム変更により「工芸染色実習B」における一連の伝統的手法による作品制作は平成30年の作品展が最後となった。今後は、新たな技法とテーマで様々な作品制作が行われていくことを期待したい。

表1 平成29年度・30年度出品者

平成29年度	平成30年度	
新井穂乃佳	石 彩花	馬場 倫加
飯田 真琴	久保 真彩	布施 遥夏
小林 莉和	佐藤 実穂	渡邊 晴南
竹田 涼花	高頭華菜絵	渡邊 唯香
守谷 咲桜	石田菜々子	
中里 美月	岡田 李恋	
本間美彩都	加藤こと実	
師岡みずき	坂田 美樹	



写真1 絞り染ストール（平成29年度）



写真2 絞り染袱紗（平成29年度）

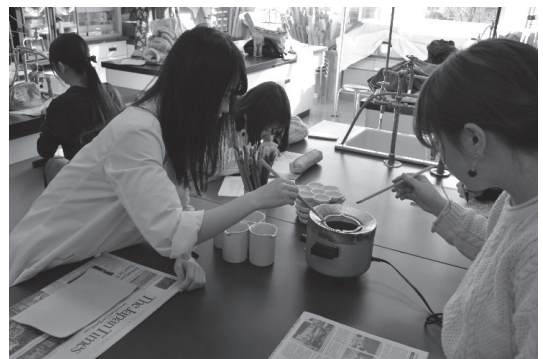


写真3 ろうけつ染 ろう描きの様子（平成29年度）



写真4 友禅染 地染の様子（平成29年度）

5. 現代生活学部 生活デザイン学科

大淵 和憲

はじめに

生活デザイン学科の専門科目「テキスタイルデザイン実習」は、平成29年度に3年生16名、平成30年度に3年生9名が履修・受講し、卓上手織機を使用してテーブルセンターを制作する「基礎制作」と、基礎を踏まえて自律的にテキスタイル作品を制作する「応用制作」に取り組んだ。

平成29年度・30年度学生作品展で作品を発表した出品者は表1の通りである。

表1 平成29年度・30年度学生作品展出品者

平成29年度	阿部仁美	石川茉莉那	大野澄礼
	田口結菜	野田山陽子	平岡春菜
	丸山香澄	村越 瞳	山口莉奈
	石田有香	小俣初音	川元みさき
	近藤星羅	佐野文音	高塚安奈
	村上可南子		
平成30年度	飯田真琴	小林莉和	竹田涼花
	前川杏樹	松永束咲	満島ゆり子
	守谷咲桜	中里美月	前田博美

(いずれも「テキスタイルデザイン実習」受講者、順不同)

1. 基礎制作作品・テーブルセンターの展示

まず「基礎制作」では、平織による網代柄（写真1）を表現するため、2色の糸を交互に並べて柄を構成し、整経・機上げ・製織の作業を学んだ。特に経糸を扱う上で求められる繊細さや力加減、緯糸を通す上で必要なテンポ感などを、学生各々が実際に体を動かしながら理解を進めていった。また、製織後の仕上げとして織端を房でまとめる「結び切り」や「ねじねじ」等の手法を学び、テーブルセンター作品を完成させた。

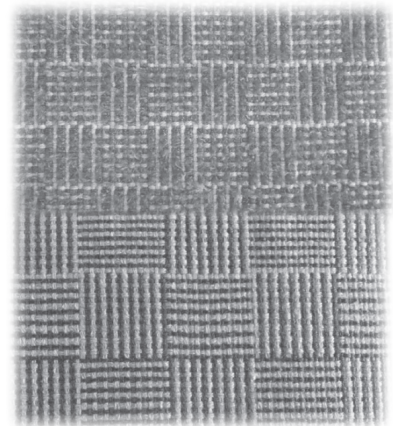


写真1「基礎制作」で用いた網代柄



写真5 絞り染作品展示の様子（平成30年度）



写真6 絞り染袱紗展示の様子（平成30年度）



写真7 ろうけつ染作品展示の様子（平成30年度）



写真8 友禅染バッグの展示の様子（平成30年度）



写真9 型染額絵の展示の様子（平成30年度）

2. 平成29年度応用制作作品の展示

平成29年度の応用制作は、基礎制作の学習内容を土台に、テーブルセンターよりも織り幅の大きい「クッションカバー」や、製織長が長い「マフラー（写真2）」、あるいは逆に細やかさが求められる「小型ブックカバー」等、学生各自が様々なニーズをとらえた上でテキスタイル作品の制作に取り組んだ。また、織機も卓上手織機のほか、65cm幅や100cm幅の大型ろくろ式織機を使用することで、織機の多様さについて理解を深めることができた。あわせて柄も「千鳥格子柄」や網代柄のバリエーションである「グラデーション柄」、さらに綾織組織で構成される「檜垣柄」などをデザインに取り込み整経・製織することができた。



写真2 平成29年度応用制作作品
「マフラー」（制作：佐野文音）

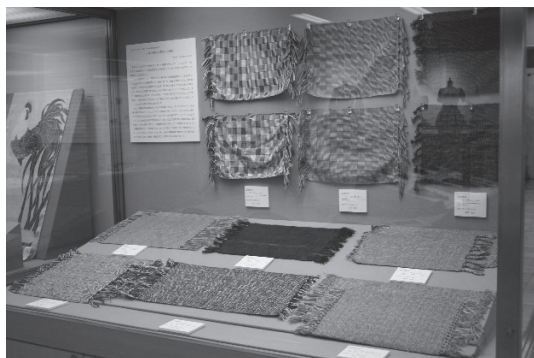


写真3 平成29年度基礎制作作品展示の様子



写真4 平成29年度応用制作作品展示の様子

3. 平成30年度応用制作作品の展示

平成30年度の応用制作は、基礎制作で学んだ各作業を土台として、「千鳥格子柄」の表現のために整経方法を変えたほか、65cm幅の大型ろくろ式手織機による広幅生地を用いた「あずま袋」や、太めの緯糸を高い密度で打ち込むことで強度を高めた。



写真5 平成30年度応用制作作品
「肩掛けカバン」（制作：前田博美）



写真6 平成30年度応用制作作品
「ポシェット」（制作：飯田真琴）

「肩掛けカバン（写真5）」、あるいは縫製作業で細やかさが求められる「ポシェット（写真6）」等、学生各自が思い思いのテキスタイル作品の制作に取り組んだ。

おわりに：伝達媒体としての作品集制作の意義

実習では、テーブルセンター作品に学生各々がタイトルを付け、ストーリー性を持たせたテーマに基づき作品集用の写真を撮影し（写真7、8）、原稿を作成する課題を課した。完成した作品集は学生作品展でも閲覧用に展示された。作品自体の完成度も重要であるが、コンセプトを考案・表現し伝達するというスキルは、今後の卒業研究等にも資するものと考えている。

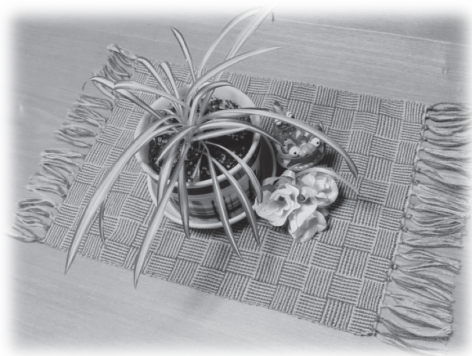


写真7 平成29年度基礎制作作品
「テーブルセンター：落ち着きの中に明るさを」
(制作・撮影：川元みさき)



写真8 平成30年度基礎制作作品
「テーブルセンター：祖母へのプレゼント」
(制作・撮影：満島ゆり子)



写真9 平成30年度基礎制作作品展示の様子



写真10 平成30年度応用制作作品展示の様子

6. 現代生活学部 生活デザイン学科

高尾 純宏

平成29年度卒業研究「東京家政学院大学・学友会館
ラウンジチェアの提案」 宮坂 映里奈

■目的

本学町田キャンパス内の整備充実のために、学内の動線、建物の整理、増設等を取り入れたゾーニングを見直した。ある程度の中規模大学を目指すため、学科組織の増設、定員の見直し、また学内の公共一般開放部分と、女子大学生専用部分とを分離し、中間のエリアに体育・サークル施設を設けている。各学科棟からなる学生専用のエリアの中心に学友会館（3階）を提案する。学友会が自治運営するこの会館は、茶室、生協、展示スペース、学友会事務室、KVA祭実行委員会事務室、会議室1、2を有し、1階には学生が自由にくつろぐためのラウンジ(ローズコート)が設けられている。その空間に設置するための椅子のデザイン提案を行った。

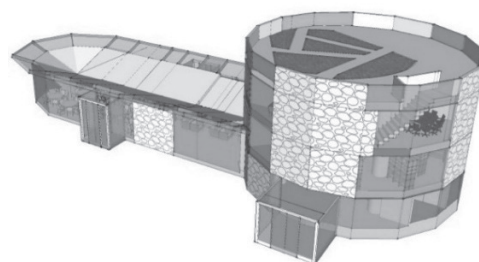


図1 学友会館外観スケッチアップ

■ラウンジチェア デザイン考案の方法

条件を定め参考資料の収集、データや特徴を参考にアイデアスケッチを行う。設計図の制作、模型制作、ラウンジチェア制作。

■イメージ写真



写真1



写真2



写真3



写真4

■ラウンジチェアの提案（コンセプト）

①東京家政学院のマークを装飾として取り入れる。（マークに包まれるイメージ）②個人個人が優雅な気持ち、ひと時に浸れるお洒落な椅子。③女性らしい柔らかい雰囲気で華やかなイメージ。④シンプルで現代的なスタイル領域を参考。⑤木材と布地を使用し、座り心地を考慮。⑥プロトタイプⅢ（背の角度105°）を参考にデザイン。

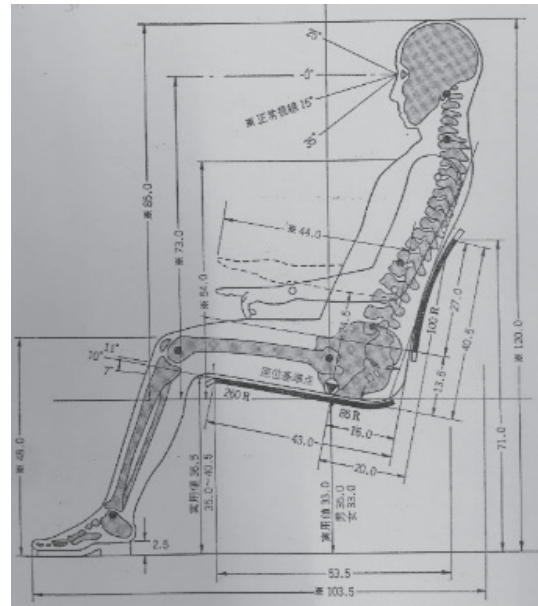


図2 プロトタイプⅢ

■材料

木材/ナラ 36mm × 240mm × 1800mm × 2枚、ナラ柃目突板 900mm × 1800mm × 2枚、綾テープ 25mm × 18M、クッション背中 320mm × 450mm、厚さ 40mm、クッション座 480mm × 410mm、厚さ 40mm・布 900mm × 2M

■デザイン

校章のマークを特徴とし、校章に包まれるようなイメージにするため背面、測面にマークを模様化した装飾を取り入れた。前脚、後脚と座面側との角に角木のデザインとしてマークを取り入れた。強調されないようさりげなさを出すために工夫した。

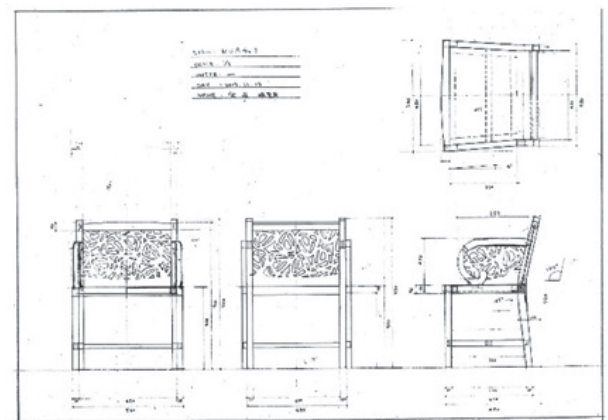


図-3 三面図



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9

■制作を終えて

実際に座ってみて安定感があり、ひじ掛けの位置も丁度良く座り心地も痛くなかったが、クッションの厚さ30mmの予定を、柔らかさを出すために40mmとしたところ、座り心地は柔らかくなったが高さが少し増したため私には少し足が浮いてしまう。

マークの装飾は透かし穴を開けるのに思ったより時間を要してしまったが、マークに包まれるメージが表現できたのではないかと考える。クッションの色はもう少し暗めの紺や、校章の色に合わせて淡い赤を使用した方がよいのではないかと考える。東京家政学院大学、学友会館のラウンジの雰囲気に合った華やかでお洒落な椅子が制作できたのではないかと考える。



写真10 展示の様子